

ソーシャルフットボールで世界へ大きな挑戦!

川岸 浩二さん



チームワークとコミュニケーションが求められる「フットボール」。最近では、精神疾患などがある方の回復や社会復帰に効果があるとされ、日本では「ソーシャルフットボール」として病院などでのプログラムやクラブチームで多くの方が活動しています。5月13日～16日にイタリア・ローマで開かれた精神障害者フットサル国際大会「Dream world cup 2018」に、日本代表チームとして初出場した当別町在住の川岸浩二さん（35歳）にお話を聞きました。

中学からキーパーに魅了

中学の時にサッカーを始めました。当時、サッカーをよく教えてくれたのは、現在ではフットサルの全国リーグ（Fリーグ）での活動経歴をもつ、とても尊敬する先輩です。僕のポジションは中学の時から「キーパー」で、足元のボールさばきやシュートなどは小学生からサッカーをやっている子にはなかなか敵いませ^{かな}んでしたが、キーパーなら放たれるシュートを止めることができました。そこにキーパーの魅力を感じ、この時のサッカーで感じた楽しさが、今のフットサルにつながっています。

フットサルへの活動を広げる

高校の時は、思うようにサッカーには取り組めず、本格的に再開したのは26歳のころで、当別町役場サッカー部の練習に参加していました。その後、僕が利用する訪問看護のソーシャルワーカーからの紹介もあって、札幌のクリニックのフットサルプログラムに参加するなど、活動する機会が増えました。

今回の国際大会へ出場するきっかけになったのは「リベルダーゼ北海道（北海道選抜チーム）」です。

日本代表チームの練習

僕は対人関係が苦手で、その人からどう思われているかを考えてしまうと、人に恐怖心を抱いてしまいます。特に同年代との関係は苦手です。日本代表チームでは3回の合宿を経て国際大会へ臨みましたが、初めての合宿でチームメイトとの関係に悩みました。ゴールキーパーとして相手に指示や声かけをすることが不安になってしまったんです。自分でマイペースでいこうと気持ちを整理してからはその後の練習も思うようにでき、リラックスした状態で国際大会へ臨めたので良かったです。

国際大会へ初出場!

5月に出場した「第2回国際大会」には、フランス・アルゼンチン・スペイン・ハンガリーなどのサッカー大国など、9カ国が参加しました。日本は予選リーグでダントツの1位通過で、ベスト8に入りました。そ

の後の準々決勝のハンガリー戦では勝てるチャンスがありましたが、残念ながら敗退しました。試合終了のホイッスル直前に放った同点のシュートに喜んだのですが、このゴールは認められずにとっても悔しい思いをして帰国しました。残念な結果でしたが、いろいろな国の人とサッカーを通じて触れ合ったり、会話ができて良かったです。そして、周りで支えてくれた皆さんやイタリアまで同行してくれた「北海道精神障害者スポーツサポーターズクラブ」の井上誠士郎先生には、本当に感謝しています。とてもよい経験ができました。



国際大会への結果報告で表敬訪問された川岸さん。とても堂々と明るい表情で、フットサルへの思いをお話してくださいました。今後もご活躍を期待しています。

(6月1日取材)